
非常識日常

幻時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非常識日常

【Nコード】

N0413F

【作者名】

幻時

【あらすじ】

同じことを繰り返しているような退屈な日常を過ごす暖^{だん}。しかしその日常は、一通の手紙により一変することになった。

序奏

歌が好きだった。

流れのあるメロディーに乘せられて届いてくる言葉は、心に染みわたってゆくようだった。

そして、心の支えとなった。だから、歌が好きだった。

ふと気付くと、11時を回っていた。

「…もう寝なきゃな…」

僕は電気を消し、ベッドに倒れこんだ。

また、明日がくる。明日が今日になり、また明日がくる。

当然のことだったが、繰り返しているような気分になっていた。

一日に楽しいことは一つか二つ。それ以外は、どうでもいいことだらけだった。

こんな日常に、展開なんてない。終わりもないのではないかと思えた。

なかなか寝れなかった。寝たって、明日の眠い朝がくるだけだ。

「暖〜？早く下りてきなさい」

母の声が聞こえた。

もう朝か…。8時間も寝ていたのに、睡眠というものは相変わらず短く感じるな…。それ故、眠った気がしない…。

時計は十分過ぎだ。もう、あと五分くらい…。

「暖〜！学校に遅刻するよー！」

ん、まだ遅刻するような時間ではないはずだ。と思いきや時計を見ると三十五分過ぎである。

寝すぎた…。

「おお、ヤバイ」

ベッドから飛び起き、急いで服を着替える。眠気なんか忘れる。

「暖〜！！遅刻はしたらいかんよー！！！」

「ああ、わかったって！」

階段を駆け下り、ご飯を食べ、家を出る。ご飯は抜きたいところだが、食べないと昼までの間に死にそうになるので、少しでも食べるようにしている。

「遅刻だけは、したくない」

そう呟きながら、全力で自転車をこぐ。

ただでさえ提出物が全くといっていいほど出ていないので、遅刻などしたらもっとひどいことになる。

通学路など無視し、信号も横断歩道もないところを突っ切る。

これが先生にみられたら遅刻どころのもでなくなるし、車も走っていて危ないのだが、スリルがあって何気に楽しかった。

「ああ、大丈夫だ。間に合う」

学校につき、急いで靴をはき替えようとした。だが、自分の靴箱の中には一通の手紙が入っていた。

一瞬ラブレターかと思った。いや、本物ではなく誰かのいたずらの、だ。

しかし、その手紙にはこう書いていた。

「5のうらみ、ひかりにかざされたときのじこくはくらやみにつまれるが、あけたとしのきょうそのときそこで、ふたりはうんめいによりこのよからきえる」

…は？

僕はその文章を全く理解ができなかった。まず、なぜすべてひらがななんだ…。

部分的に、「光に翳されたときの時刻」と「暗闇に包まれるが」と「明けた年の今日そのとき、二人は運命によりこの世から消える」の意味はわかった。が、文としてつながりにくいし、なぜ二人は運命によりこの世から消えるのかがわからない。

もっとわからないのは「5の恨み」だ。普通に意味がわからん。

よくみると「5」だけ奇妙な形をしていた。丸みがない、というか…。

やはり、誰かのいたずらだろうか。それでなければこの文章に何か意味があるのか…？

考えた。時間も忘れて考えた。すると、チャイムが鳴った。

「あつ、やべっ！遅刻！」

もう遅い。

僕はこの手紙のせいで遅刻してしまった…。

第一奏：手紙の正体は？

僕は急いで教室に向かった。

今ごろ教室では先生が生徒に話をしているころだ。

僕は遅刻したとき、その空気の中に入っていくことにいつも気まずい思いをしていた。

が、どうやら今日はその思いをしなくていいようだ。

教室の前までいくと、教室の中が騒がしい事に気づいたからだ。

しかし、何を騒いでいるのだろう。

入ってみると先生はおらず、生徒たちが自由に話し合っている。

僕はとりあえず荷物を机の上に置き、なぜ騒いでいるか聞くことにした。

「どうしたんだ？」

僕は友達の冴輝斗に聞いてみた。

「んーどうって、アレだよ、手紙手紙。皆あの手紙にキョーミ深々だよー」

「手紙？手紙って、何の…？」

「お前も靴箱ん中に入れられてただろ？それだよ」

え、お前「も」

「…ってことは、みんなもらってるってことか？」

「そうだよ。…何だ、お前。ラブレターでももらったかと思ったんか？」

ニヤニヤしながら冴輝斗がいう。

「んなわけねえだろ。」

俺は即否定した。誰かのいたずらのラブレターかとは思ったが、本物とは思っていない。そんなに自惚れてない。それに。

「ラブレターにしちゃあ、意味がわからなさすぎだぞ」

「だよな。何なんだろな、ありゃあ」

まったくだ。「5の恨み」とか。5に恨みなんてあるわけねえだろうが。それにこの世から二人が消えるって…。どうやって消えるんだろう。手紙が送られた奴の中から二人消えるんだろうか…。

「あ、そういうや、手紙もらったのって、この組だけか？」

僕は聞いた。

「いや、2年全員らしいぞ。でも、入れたのは誰かわからないらしい。生徒でないことはわかってるらしいが」

「ん、なんでわかってんの？」

「まだ生徒が誰も学校に来てない朝早くに、偶然先生が見つけたんだとよ」

ほう。じゃあ学校外の誰かのいたずらか。先生がイタズラするわけないし。

「あ、そっぴや先生どこにいるの？」

「この手紙について今、臨時職員会議中だよ」

まあ、そりやあ会議するわな。もし本当に手紙をもらった人の中から二人消えたら大事だ。

「でも、本当に二人消えると思うか？ 冴輝斗」

「思えんね。物体が消えるなんてありえんから。常識的に」

「だよな。でも、なんか意味ありげじゃね？」

「まあ、暗号が何かだとしたら、面白そうだな」

暗号。そう思って考えてはみたが、全くわからない。

そうこう話していると、先生が教室に入ってきた。

「えー皆さん。この手紙の件は、イタズラということになりました。誰のイタズラかはわかりませんが、それについては後々調べます」

生徒たちから、「やっぱりイタズラかよ」とか、「イタズラに決ま
ってんだろ」などの言葉が出る。

その中の一人が、

「先生、防犯カメラには映ってないんですか？」

と聞いた。

「映っておりません。学校に誰かが侵入した痕跡もありません」

先生がそう答えた。

僕は妙に慎重なイタズラだと思った。

「尚、この件に関して、皆さんの保護者には学校側から伝えておき
ますので、親に余計なことはいわかのように。以上。一時間目の用
意をして、休憩してください」

それで、先生の話は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0413f/>

非常識日常

2011年1月16日07時37分発行